

て川中に沈めらる。豊舟の家士眞砂勝海來つて二位姫の危急を救うて敵手に驚る。二位姫乃ち西王母の桃を吹込みて之を蘇生せしむ。かくて落ち行く途中村任に追撃せられしが、勝海の子の勝興に助けられて山城國美豆御牧に逃れ、狐川の堤より舟に乗る。この川に正八幡菩薩老翁に化現して釣糸を垂れ、泥鰌を釣り其口より掃若を引出して二位姫に授く。後、二位姫は大和路の郡山にて薄雲に絞殺さる(日本西王母)

ねのひ 子日 賀茂社の巫女なり。大江千里を戀慕し、醍醐大臣の媒介によつて千里と相逢ふ際、嫉妬の間違ひより青柳を刺殺し、申譯なしして千里と共に熊野の森にて死せんとし、冷泉坊の法印に誦されて思ひ止まる(融大臣)

のぶたか 三條吉次信高。金賣商なり。鞍馬山に牛若を尋ねて藤原秀衡の手紙を渡し、相伴ひて奥州に下らんことを約して別る。かくて牛若を伴うて奥州に下り、其歸途峯の業師の笹谷にて、藤太が浮瑠璃姫を殺し其侍女をも斬らんとするに際會し、藤太と斬合ひしが、樵夫の通掛るを見て之に金を與へて藤太を殺さしむ(十二段)

に若を連れて奥州に下る途中、三州矢矧の宿に泊る(孕常盤)

のぶひさ 横山郡司信久。伊豆相模を領し、太郎次郎三郎、照手・更衣の五子あり。信久三郎の言を聽いて小栗判官兼兵衛を毒殺す。後、三郎に放逐せられて前非を悔い、蘇生したる兼兵衛を藤澤寺に訪うて謝罪す(當流小栗判官)

のりかせ 若狭之介則風。山上有風の

嫡子なり。播州室津の遊女花月に馴染み、親より勸告を受けて零落し、花月との間に設けたる金子松を貰ひて唐人行列の繪半紙を賣る。是時藤原姫に扮せし花月と邂逅し、尋で入鹿の追手來つて花月を奪ひ去る。則風讃州志戸浦に赴き、五郎介と稱して浦の蓋蒲月と契る。藤原鎌足・入鹿の難を避けてこの浦に來る。則風乃ち鎌足の命を奉じ、諸官に至つて面而不背の玉を得んことを満月に頼まんとする際、前妻の花月尋ね來る。則風怒つて花月及び金松を斬り、満月をして海底を落つて玉を探らしむ(大織冠)

のりつね 能登守平朝臣教經。俊寛僧都の室吾妻屋・平清盛に捕へられて其意に従はず。是に於て教經、吾妻屋に逢ひ、汝の貞節は我之を立てて取らずし、汝は清盛の詞の立つやう返辭すべしと暗に自害を願す。

吾妻屋乃ち自刃す。教經其首を包みて清盛に見す。是時俊寛の下人、有王丸清盛の邸内に亂入す。教經之を殺すを憫んて追拂ふ。丹左衛門尉基康・妹屋太郎兼盛の兩人清盛の命を受け、鬼界島の流人成經・康頼召還の使者となつて行かんとす。教經乃ち俊寛をも召還せしめんとし、重盛の命と稱して俊寛赦免状を認めて之を渡す。治承五年閏二月牛島及び吾妻屋の怨讐現はるや、教經矢を放つて之を調伏し、二位殿に逢ひて平家襲運に傾けるを夢みたるを語る。是時諸國の武士平家に叛きて源氏に應ずる者多しとの注進あり。教經乃ち宗盛と談合し討手の手分せんとす(平家女房傳)

屋島の合戦に教經兵船を敵陣近く潜寄せて名乗を揚げ、義經を誂ひて射殺さんとせしを、佐藤繼信通み出で義經の身代りとなつて教經の矢先立つ。教經乃ち繼信を射殺す(津戸三郎)

のりのぶ 藤原花二郎教信。坊門中納言實雄の子なり。幼時母に連れられて藤原教孝に養はる。長じて己が實父は高梨吉内左衛門友重に殺されたるを知り、亡父の仇を報せんとして變装し、津の國櫻塚にて祭文を語り、友重に遇つて敵討の聲を掛けしが、そは友風が養父友重の身代りとならんとしして友重と名乗れるを聞き、且病身なるを見て、全快の上勝負を決せんことを約して別れしが、友風病死して中山寺に葬送せらるる由を聞き、其實否を確めんとて中山寺に赴き、友風の死體に我魂の亡魂の入替れるとは知らずして生ける者と思ひ、其卑怯を罵りしが、其實を知るに及んで人生の無常を歎き、これより發心して教信法師と法名し、嫂の末子を佛門に入れて補佐し、七墓地を巡りて飛田墓所に斃死せる甥眞光を蘇生せしめ、賀古の庄に寺院を建てて回向の大導師となる(賀古教信七墓廻)

のりより 源範頼。頼朝の弟なり。伊豆の修禪寺にて落飾し法名を源雄と云ふ。曾我の下人鬼王に遇ひ、曾我二子の爲に富士裾野の營中に入り得る御符二枚を與へて幕府出陣し、鹿嶋の御をなせる際、梶原平次景高より御符を穿鑿せられて口論し、怒つて景高を斬らんとし果さず。其家來八幡三郎を斬つて自刃す。行年三十五(曾我會稽山)

はいあん 梅庵。醫師なり。扇屋の名妓夕霧の病氣を診察し、病篤くして醫藥も效なきを語る(夕霧阿波鳴渡)

はいぶんせき 斐文籍。唐土の照宣皇

帝の勅使と稱して渡來し、延喜帝に謁見して菅丞相の學徳を賞揚せしが、藤原時平の暗略を受けて菅丞相を誅す(天神記)

はいりよう 赤松梅龍。岡崎村に住し、太平記講釋師にして、大經師以春の下婢たまの伯父なり。以春の妻おきん、手代茂兵衛と不義に陥るや、たま其媒介をなせる故を以て、手代助右衛門に縛せられた梅龍に預けらる。梅龍は助右衛門がたまを縛したるを怒つて之を毆打し、又たまに理非を説いて之を殺し、玉の首桶を携へておきん、茂兵衛の御搦に赴き、たま一人を罪しておきん、茂兵衛を救はんことを請うて拒絶せられ、心鑑亂して傍殺しめたる助右衛門に斬付く(大經師首懸)

はいろくわち 貝勒王。韓親主順治大王の鎮護大將なり。韓親主の使者となり、明に朝して貢物を獻じ、華清夫人を調ふを口實として、明の逆臣李滔天と謀つて明を滅さんとし、遂に韓親主を率ゐて來襲せしが、九仙山の戦に敗れて吳三桂、鄭芝龍に殺さる(國性爺合戦)

はうくわん 馬府官の誤。福建國守劉乃那六安王の臣なり。陶民子が實劔を繼ふる勳奉行となり、陶民子の妻に實劔を辱せられたるを知らずして持歸り、その欺かれたるに氣付くや、兵を率ゐて陶民子を擧うて朱一貴及び紫無と屋上に格闘して投擲はさる。(唐船斬)

はうげんれい 房玄暉。唐太宗皇帝の面而不背の玉に贈りて寵見を述べ(大織冠)

はうしやう 平井保昌。源頼光の家士

なり頼光家督定めの使者となつて頼朝・頼平の邸を訪ふ。頼朝伊豫内侍と結婚の夜脱賊將軍太郎と格闘し、また葛城山に土蜘蛛を退治して武功を立つ(關八州警馬)

はぎのたい

萩對。江文宰相爲成の家なり。駿馬の舞を奪はんとして闘入せる藤原保輔等と格闘す。爲成官位を削られて追放せらるるや、萩對乃ち詠歌姫をして源頼平を殺さしめんとす(關八州警馬)

はぎのまへ

萩の前。佐佐木三郎盛綱の妹なり。待宵・時雨の姉妹が男装して、蘆薈の萩賣りとなつて來れるを見て戀慕す。後、由比濱にて待宵・時雨の母刑せられんとする場に赴き、身を以て之に代らんとす(佐佐木先陣)

はぐだつた

伯達多。雜種人にして忍術を好くす。五府將軍石門福と共に國性爺の據れる東興城工風の間に闘入して經鎌倉に歸る

はくれうとん

伯了頓。源將軍の郎等にして搦邊連多の黨類なり。搦邊連多の用命を得びて備邊彌を訪ふ途中馬路裏と闘つて谷底に落ちる。後、耶輸陀羅女を宮門に要撃して吉祥女に斬殺さる(釋迦如來誕生會)

はこわう

箱王。曾我五郎時政の幼名なり。幼時父の祐重が工藤左衛門尉經に殺さる。是に於て箱王は兄の一萬と共に常に父の仇を報せんことを思ふ。母・曾我祐信に再嫁するや、連れられて其家に養はる(頼朝伊豆日記)

「いちまん」

條を見よ(本領曾我)

曾我十郎

祐成の弟にして、長じて五郎時宗と稱す。母の憎となきんとするを嫌ひ、綱を頼みて結髮し、綱より亡父の形見の弓懸を貰ふ

ふ。是時假左坂の遊女少將に慕はれて袖を貰ひ感動を通す。また下人朝三郎の草鞋取に變装して箱根権現に赴き、工藤祐經の下人と喧嘩して非力な力量を發揮し、朝比奈義興と力争し、また祐經の下駄・傘を奪ひ、祐經の力この事を知り、時宗の身を案じて勘當を申渡す。時宗泣入つて其儘眠り、兄祐成が大横遊郎にて祐經の即駕に包圍されて危急に及ぶるを救ひ、母より勘當を赦されたるを夢みて目覺むれば、勘當ともなくなるに深く悲しみ、和田秩父を頼まんとして泣く泣く立去る。かくて後兄と共に富士裾野の假屋に工藤祐經を斬つて亡父の仇を報じ、なほ頼朝の腰所近く斬入り、遂に捕はれて殺さる。時に建久四年五月二十九日なり。頼朝曾我二子の孝心に感じ、富士裾野に社を建てて義經と合祀す(加増曾我)

はしろう

馬周。唐太宗皇帝の中書令たり。日本に贈らんとする花原朝・加清石、面不肯の玉に就いて意見を述べ(大維冠)

はしやうぐん

婆將軍。源平王右の司なり。搦邊連多を備邊彌の養子となし、以て源平王の太子たらしめんとして吉祥女に嫁せらる。後、釋尊降誕の場に亂入して車匿に處げらる(釋迦如來誕生會)

はせう

芭蕉。千手入道の女にして女院の水仕女なり。禪九に戀戀し、禪九の愛人直姫を妬みて宇治の橋姫社に丑の時詣をなし、三善清行に見らる。後、父の家の門前に浦行に斬る(後十七)

はちぢやう

石部の八藏。馬士なり。朋輩與作と賭博して勝ち、與作の牽るる馬を奪

はんとして喧嘩し、與作に投擲さる。また馬方三吉が竊盜したるを憎んで踏破り額に疵を眞はしむ。爲に三吉に恨みられて斬殺さる(丹波與作)

はちへいじ

白崎八平次。二宮大郎安清の家士なり。安清が妻を離別する使者となつて行く(曾我倉橋山)

はちらう

片岡八郎。源九郎義經の家士なり。義經と共に京九條北町の遊脚柏屋に登壇し、三谷谷四郎國時と首引の争に勝ち、歸途國時に要撃せられ、辨慶と共に奮戦して國時を殺す。後、義經に陪從して吉野山に分け入る(吉野忠信)

はちあもん

「ちゆうべま」條を見よ(冥途預備)

はつ

阿初。大阪堂島新地(堂島北濱通り)天満屋の遊女なり。田舎客に連れられて大阪三十三番の觀音を廻り、生玉社の出番屋にて愛人平野屋徳兵衛に遇ふ。徳兵衛主人の妻の姪と婚するを拒絶したるを話合へる際、九平次の來るを見て時袋銀の返済を催促して喧嘩となる。お初は徳兵衛の身を思ひ腕げども、強ひて舞籠に入れられて歸る。明翠妓等お初に徳兵衛の悪事を語る。是時徳兵衛來つてお初と逢ふ。九平次も來り徳兵衛の居るを知らずして之を罵詈。徳兵衛憤恨に堪へず、喋して覺悟をお初に知らせ、其夜相共に曾根崎の森に走つて情死す。お初行年十九(曾根崎心中)

はつせのわろじ

洵瀨皇子。安徳天皇の皇弟なり。世を遁れて丹後國與謝の漁夫となり給へるを、總攝藤原等々に迎へられ、都

に遷りて帝位に即き雄略天皇と申し奉る。中帯姫の濫行を憂ひ、玉體を誅して入牢し給ふ。後、葛城山の御狩に出でられ、逆賊扇輪王を誅し給ふ(浦島年代記)

はつゆき

初雪。足利義輝の家の侍女なり。室に陪從して賀茂明神に參詣す。後義輝の邪険の奴にかかつて死し、其怨靈足利義昭の夢に現はれて義輝を退す(津國女夫池)

はな

阿花。京四條石懸町の娼家并筒屋の遊女なり。刀屋石見某の手代半七と馴染み、半七の伯母と偽りて刀屋に半七を訪うて會談せる際、半七の伯母も訪ひ来る。是に於てお花の偽り露顯す。石見怒つて半七、お花を毆打せしが、伯母の執成しによつて事なきを得たり。お花の養父九兵衛并筒屋に來り、お花の勤めの年期を延ばして二十兩を得んとす。お花養父の意に従はずして毆打せらる。坊主客に連れられて西右衛門の茶屋に行き、明翠妓と阿彌陀の光といふ遊戯をなし、探籠に當りて豆腐買に出でて半七に逢ひ、相携へて大阪町なる半七の伯母を訪ふ(長町女腹切)

はなてるひめ

花照姫。攝石大臣富房の女なり。逆目王子の奸策によつて我姿を醜く畫かれて往來に嫌はれるを見て悲しみ給へる際、愛人葛城大君と邂逅し給ふ。是時逆目王子一味の惡黨に包圍せられて金輪五郎今國に助けられ、葛城大君と共に春日の里に落ち行かれて采女の家にと宿らる。其夜葛城大君が采女と祝言の盃を交し給へるを嫉妬せられて御湯の池に投身せられしが、天照大神・春日住吉の大明神老爺に化現して極を蘇生せしむ。葛城大君・花照姫・采女連立にて三社禮拜の爲まづ住吉に詣でらる(天智天皇)

はなの 花野。曾枝三子の下人鬼王の妹なり。仁田四郎忠常に遇ひて、曾枝殿前は大腹に馴染の遊女ありと聞けば、若し其遊女の腹に子あらば何卒助け下されよと頼んで猛虎の生爪を贈る(百日記)

はなのじよ 雑賀屋花之丞。高野山南谷吉祥院の寺小姓にして白痴なり。妹お梅と朗聲成田久木之介との密通を朗聲仲間語つて戯る(心申萬年草)

はなひとしんわろ 豊日花人親王。敏達天皇異腹の御弟なり。山彦王子外道を借じて其流布を主張し給ひし時、親王は佛法を主として互に法力を競べ、花人親王の勝となる。親王、玉世姫の邸に行かれて、姫と殿勤を通じ給へる際山彦王子に騙はれ、姫と共に連れて西國に落ちんとし乗船し、吹流されて佐渡に漂着し、諸君に助けられて播州に至り、兵藤太宗岡が梵鐘を海より引上ぐるに際し、豊後に落ち磯野の長者の草刈に雇はれて山路と稱し、玉世姫の總母の命を受けて五種の毒草を刈り給ふ。かくて後都に還りて帝位に即き用天皇と申し奉る(用明天皇)

はなむらさき 花紫。佐藤四郎兵衛忠信の姪妻なり。鳥羽殿に住みけるが思借久しく訪れなきより、之を尋ねて九條北町に行く途に忠信に遇ひ、また貞順尼と妻をかへるに赴き、御堂にて御前と邂逅す。此時山法師に聞まれしを若紫、三人共に遊女なりと陳じて女郎名寄を語りし爲放免せらる(吉野忠信)

はなよ 花代。悪右馬尉仲成の女にして橘判官勝藤に嫁す。父逆心を懷き大海原王子に

一味して勝藤の敵となる。勝藤乃ち仲成を殺して妻を離別す。是に於て花代果物賣となり、離職の離官に行き己の漬漬に邂逅し、伴うて牧家に歸り孝養を盡ししが、不在中に何者にか舅を奪去られ、其行方を尋ねて狼谷に至り、高札を讀んで兄の大炊介仲經が舅を奪ひて殺したるを知り、兄を殺さんと決心したる際勝藤に邂逅して相共に兒の宅に斬入りしが、深き事情を知つて兄の心に感じて我身の輕怨を謝し、仲經の妻と共に四國八十八の札所を巡りて都に上る(嵯峨天皇甘露)

はまより 前判官演頼。判官官勝藤が父なり。歳九十三に及び嵯峨の御所に赴きて拜する際、勝藤が離別せし嫁の花代に邂逅し、互に情愛に咽び、遂に花代に連れられて其家に行き介抱せられしが、大炊介仲經に奪去られと厚遇せらる。勝藤が仲經を父の仇と信じて斬入りし時、演頼通出でて仲經の義心を談じて勝藤を諭す(嵯峨天皇甘露)

はやびめ 早姫。津戸三郎勝平の妹にして佐藤三郎兵衛總信の妻なり。總信が源九郎義經に従ひて平家討伐の軍に加はらんとし、紫明神に夢語するや、早姫は佐藤忠信に嫁され、泣いて總信の従軍を思ひ止まらしめんとす。總信、義經の軍に従ひて屋島の合戦に赴き、早姫は夫の身を氣遣ひ、子の繼若を抱き勝平と共に夫を尋ねて屋島に渡り、鷲尾三郎の姉の家に立寄りて微睡せし間に、夫に逢ひて戦争の物語を聞くを夢み、覺めて夫の討死したるを知り感歎に暮る。これより新黒谷に赴きて法然上人を頼み、夫の追善を誓ひて菩提を弔ふ(津戸三郎)

はやくわん 「はやくわん」を見よ。

はやくわん 平群準人。四大臣の臣なり。主命により仙人の生血を得んとし阿闍部領諸宗と共に葛城山中に分入り、大草香の臣に殺さる(浦島年代記)

はやくわん 平群準人。四大臣の臣なり。主命により仙人の生血を得んとし阿闍部領諸宗と共に葛城山中に分入り、大草香の臣に殺さる(浦島年代記)

はやくわん 平群準人。四大臣の臣なり。主命により仙人の生血を得んとし阿闍部領諸宗と共に葛城山中に分入り、大草香の臣に殺さる(浦島年代記)

はやくわん 平群準人。四大臣の臣なり。主命により仙人の生血を得んとし阿闍部領諸宗と共に葛城山中に分入り、大草香の臣に殺さる(浦島年代記)

はやくわん 平群準人。四大臣の臣なり。主命により仙人の生血を得んとし阿闍部領諸宗と共に葛城山中に分入り、大草香の臣に殺さる(浦島年代記)

はやくわん 平群準人。四大臣の臣なり。主命により仙人の生血を得んとし阿闍部領諸宗と共に葛城山中に分入り、大草香の臣に殺さる(浦島年代記)

はやくわん 平群準人。四大臣の臣なり。主命により仙人の生血を得んとし阿闍部領諸宗と共に葛城山中に分入り、大草香の臣に殺さる(浦島年代記)

はやくわん 平群準人。四大臣の臣なり。主命により仙人の生血を得んとし阿闍部領諸宗と共に葛城山中に分入り、大草香の臣に殺さる(浦島年代記)

はやくわん 平群準人。四大臣の臣なり。主命により仙人の生血を得んとし阿闍部領諸宗と共に葛城山中に分入り、大草香の臣に殺さる(浦島年代記)

はやくわん 平群準人。四大臣の臣なり。主命により仙人の生血を得んとし阿闍部領諸宗と共に葛城山中に分入り、大草香の臣に殺さる(浦島年代記)

はやくわん 平群準人。四大臣の臣なり。主命により仙人の生血を得んとし阿闍部領諸宗と共に葛城山中に分入り、大草香の臣に殺さる(浦島年代記)

はやくわん 平群準人。四大臣の臣なり。主命により仙人の生血を得んとし阿闍部領諸宗と共に葛城山中に分入り、大草香の臣に殺さる(浦島年代記)

はやくわん 平群準人。四大臣の臣なり。主命により仙人の生血を得んとし阿闍部領諸宗と共に葛城山中に分入り、大草香の臣に殺さる(浦島年代記)

はやくわん 平群準人。四大臣の臣なり。主命により仙人の生血を得んとし阿闍部領諸宗と共に葛城山中に分入り、大草香の臣に殺さる(浦島年代記)

はるなご 平朝臣春長。近江に城を構へて正二位右大臣たり。勅便三條前内大臣の命を奉じ、眞柴肥前大領久吉に讓占軍の統率を命じて、惟任判官光秀を其部下となす。光秀之を喜ばず。春長怒り近習の者をして光秀を殿打せしむ。春長また嫡子春忠の放埒を戒めんとし、京都に上り本能寺に次す。光秀反して本能寺を圍む。春長衆寡敵せずして自殺す(本朝三國志)

はるぬし 物部宿禰春主。子の日に懸想してつれなきを怒り、融大臣と子の日と相思の仲なりと謀し、融を一條坂に擲撃し、冷泉坊の法印と戦つて逃げ、又融を美濃國札の辻あたりで擲撃せんとし、馬方腕の穴藏等に搦めたり(融大臣)

はるひこのみこと 春彦尊。持統天皇の一の官にして日蝕の日に生る。皇太子となるを得ざるを憤り、諸田明神の神主鳥居三位等と逆謀を企て、王妃長秋の夢語を要撃して橋立左衛門秋廣を殺ししが、忽ち秋廣の魂と入替り、融尊を搦めたる融をもち、一味の鳥居三位、青根郡司を殺し、融を本心に立返り、憤怒して館に歸り暴怒益長じて遂に持統天皇を幽閉し借して帝と稱せしが、飛鳥の里にて尊の軍敗れて滅ぶ(持統天皇歌軍法)

はるひさ 鷹川庄司治久。鷹川藏人秀治の父なり。主君田村藤の留守中邸内の鹽治の聞きて馳付けしが、驛にして家老藤原金刑部山國の言聞えず、山國乃ち秀治の罪懸を壁に書して之を欺きしかば、治久深き子の不忠を欺きて自殺す(田村將軍初觀音)

はるびめ 春姫。拍左近盛光の女にして、母は大飯新町遊廓屋の名妓夕霧なり。

はるびめ 春姫。拍左近盛光の女にして、母は大飯新町遊廓屋の名妓夕霧なり。

はるびめ 春姫。拍左近盛光の女にして、母は大飯新町遊廓屋の名妓夕霧なり。

はるびめ 春姫。拍左近盛光の女にして、母は大飯新町遊廓屋の名妓夕霧なり。

はるびめ 春姫。拍左近盛光の女にして、母は大飯新町遊廓屋の名妓夕霧なり。

五歳にして母と死別して盛光に養はる。十三歳の時眼病に罹り、醫師の許に行く途に繼母と其情夫近藤兵衛守廣忠の爲に穢瀧の池に投込まれんとせしを、忠義の家來望月六郎左衛門高貞に助けられて、夕霧の故着靜三と云ふ比丘尼の庵室に身を寄せて、計らずも父盛光に遇ひしが、廣忠の追手急にして父と別れ、高貞の子小六郎に助けられて大阪に下り、新町遊廓にて夕霧の妹女郎の萩野に遇ひ、扇屋の夕霧供養の席に列して夕霧の昔語りを聞き、下寺町淨國寺なる夕霧の墓に詣りて、其側に眠りて亡母が地獄に墮して苛責に苦しめるを夢む。かくて後奈良に行きて父と遇ふ。父出世するに至つて番姫も五位に叙せられ、薄霧の局と稱して宮女に召さる(三世相)

はるよし 山本勘介晴幸。三州牛窪の浪人なり。母に孝養を盡さん爲樵夫となつて世を送る。桔梗が原に柴刈に出でて武田勝頼衛門殿に出遇ひ、身を隠し突るるやう頼まれしを斷り、村上義清の手勢の追撃急なるを見て、勝頼夫妻の身を案じて振向く際、野豬に飛掛かれて左足と一眼を失ふ。後、信玄の三顧の恩に感激して其軍師となり、甲越の戦に偉功を立て、遂に甲越をして和解せしむ。「てる」との條をも見よ(信州川中島合戦)

はん 阿平。江戸屋勝二郎の手代新七の妻なり。勝二郎の豪奢放逸を諷めて用ゐられず。爲に深く主の身を憂慮し病を得て死す(宛纏出世雜傳)

はんざゑもん 不破伴左衛門宗末。不破入道犬の嫡子なり。父と謀りて狩野四郎二郎元信を放逐す。京都鳥原の遊女葛城を

請出さんとし、大門口にて名古屋山三番平に斬殺さる(傾城反魂香)

はんしち 刀屋半七。京都下立賣刀屋石見某の手代にして井筒屋の遊女お花と馴染む。お花半七の伯母と偽り刀屋に半七を訪うて逢へる際、半七伯母來る。石見主人これをを見て、さこは以前の女は娼婦と見ゆ。大に怒り、お花半七を毆打す。半七伯母より國作の刀の細工を頼まれ、之を賣り下阪作の刀に質替へて金二十兩を看服してお花を訪ふ。是時お花の義父九兵衛井筒屋に來つてお花の年増を増さんす。半七乃ち九兵衛と喧嘩し、腰にせる二十兩を其面に抛り、お花と相携へて大阪長町なる伯母を訪ふ。伯母の夫甚五郎は下阪の刀に取替へられたるを知らずして武家を届けしかば忽ち悪事露顯す。情深き伯母は雄々しく其罪を引受けて切腹し、以て半七お花を通れしむ(長町女腹切)

はんちよ 班女。美濃國野上宿の傾城なりしが、吉田少將藤原朝臣行房と契りて梅若松若の仔子を生む。然るに松若は比良天狗に掴み去られ、梅若は失踪し、行房は逆臣勤解出兵衛兵過に試せらる。是に於て班女は吉田家の重臣藤原正武國を伴ひて、大理の廳に吉田家相續を願ひ出で、惡漢常陸大塚百連と口論し、精神鎚刺して狂女となり、梅若の行方を尋ねて隅田川に至り、渡守唐系より梅若最期の様を聞いて悲歎に沈み、墓前に念佛を手向くる折しも天狗雲霧の中に現はれて松若を返す。これより班女唐系松若相伴うて京に上り、東國女に變装して百連を斬り統殺す(養生隅田川)

はんぞく 周梨榮特。鳥陀夷吉神女の

子なり。資性愚鈍十歳にしてなほ父母を知らず。鶴足山に鷲に攫去られしを、櫻師林丹鷲を射て榮特を救ひ狝子として養育す。後計らずも鳥陀夷が耶輸陀羅女を伴ひて此家に来る折しも榮特鳩を殺す。俱半婆羅米つて榮特の鳩を殺したるを責めて鳩の重量だけつて榮特の肉を得んとす。榮特乃ち己が肉を裂きて之を與ふ。俱半婆羅なほ肉足らざるを責む。是に於て榮特大に怒り、秤を折つて俱半婆羅を追拂ふ。後釋尊に歸依して佛果を得たり(釋迦如來誕生會)

ばんのじょう 川側伴之丞。出雲の藩士なり。同輩笹野權三と途に遇ひ競馬を挑みて負く。偶若木忠大兵衛來つて藩主の若殿祝言の悦に茶儀行ふべきを語り、眞の壽司が茶儀を權三と伴之丞の兩人中に命ず。是に於て伴之丞は茶道指南淺香山の進の妻おさるの色を以て誘うて茶儀の祕傳を得んとし、夜中四斗樽の額を抜いて枳殼垣の中に突込み、其中を濡り裾に庭内に入つて様子を窺ふ。折しもおさる權三が夜更屋にて痴語喧嘩し、互に帯を奪うて庭に投棄す。伴之丞直に之を拾うて兩人の姦通を搦書して逃げ、おさるの弟岩木真平に斬殺さる(鐘の權三重帷子)

はんべつたう 伴別當。一條天皇御宇の卜博士なり。勅命を蒙つて夢内し、禁中變化惡馬の出づるを易を以て占ふ(開八州變馬)

を受け、勅使と伴りて日像月光等を舟に乗せ、播磨の沖に沈めんとせしが、妙法の奇特によつて佛罰を受けて溺死す(大覺大僧正御傳記)

はんべゑ 八百屋半兵衛。遠州濱松の土山脇三左衛門の子なり。實父十七年忌用ひ爲彦次郎に赴き、弟小七郎の主人坂部郷左衛門方にて城主養應の料理方となり、小七郎をして娘軍右衛門の若衆たらしむ。かくて遊州より歸る途に妻お千代の舊家に立寄り、お千代が姑にいりながら歸り來つて遇ひ、之を連れ大阪に歸りしが、姑よりお千代の離縁を迫られしを意を決し、卯月庚申の夜お千代を離別すと稱して共に家を出で、生玉の勸進所に行きて情死す(心中寄庚申)

はんちやく 手塚輔榮。鳥原の遊女更科の父なり。江州忍野の里に隱遁せしが、更科が七草四郎高衛と共に失踪するや、輔榮は足立右馬長久々に召喚せられ、高衛、更科兩人の行方を訊問せられて更に知らぬ由を答へ、見付け次第訴人すべきを約し、家に歸りて其由を妻に語り、持佛堂の前に坐し經を讀んで自刃せん。この時更科高衛及び更科の愛人葛西清治訪ひ來つて一問を起す。輔榮更科法を嫌ひ更科を誹治に托して自害す(蛙合戦)

はんれい 萬禮。陳芝約の子なり。東樂島にて國性爺に仕へ、國性爺の子經錦舎を教育す。島内の土民に繼祖主第六王子尉馬鐵平の如術を信仰し、鐵平より金を貰ふ者ありと聞き、それ等の罪徒を捕めて生鐵門の刑に處す。或夜女子が羆徒の刑場に近寄るを見て

之を捕ふれば國性爺の妻小睦なりしかば大に驚き、刑の中に鄭芝龍あるを知つて其罪を赦さんとす。また甘藷東郷城門に來りし時、萬禮父の仇と呼ばはつて冠を打落し尋で和解す。體廻軍來襲せし時之と戦つて武功を立つ(國性爺後日台歌)

ひこくろく

小倉彦九郎。因幡の藩士なり。江戸詰の留守中に妻お種と官地源右衛門と姦通す。彦九郎歸國して之を聞知し、妻を持佛堂の室に呼ぶ。お種悔悟して自刃す。彦九郎その止めを刺し、妹ゆら、養子女六お種の妹お藤と共に女敵討に出で、源右衛門の宅に斬入り、逼ぐるを追ひて堀川の橋上にて斬殺す(堀川渡巻)(實説は寶永三年六月七日大藏彦八郎が女敵討せしを脚色せるもの)

ひこすけ

葉屋彦介。藤屋の名妓吾妻に懇懇し、戀の敵山崎與次兵衛を罵詈して難與平に毆打せられたる意趣に、與次兵衛を遂に要して斬らんとし、見誤つて與平に斬付けて却つて斬られ、與次兵衛に斬られりと叫ぶ。爲に與次兵衛冤罪を蒙つて家に幽閉せらる。彦介は與次兵衛の父より謝罪金を得て吾妻を請出さんとして并筒屋に來り、計らずも難與平、梶田治部右衛門の吾妻を請出さんとするに際會し、難與平に毆打せられて治部右衛門に縛せらる(壽門松)

ひこくろく

開田彦六。左馬五郎光成の郎等なり。光成と共に城之介春忠を愛宕山に攻めて加藤虎之助正清に殺さる(本朝三國志)

ひささち

久吉。父を憲法、母を吉岡といふ。石川五右衛門に背負はれたる備捕縛せられて釜煎の酷刑に處せらる。時に三蔵(傾城吉岡築)

羽倉伊賀介久國。按察左大將早孝の意を受け、藤室女御を殺害して北面の武士となり千石に封ぜらる。小餘藏景春の妻の水仕奉公せるに通じて娶となす。或日景春の子の小文五母を訪ひ來て、母子共に景春が冤罪によつて刑せられたるを欺けるを久國聞いて感に堪へず、眞の罪人は我なりと自白し、母子に討たれんとし源頼光の家士四天王に頼めらる。後、又五郎義長に連れられて按察早孝の城下に至り、早孝を欺きて城門を開き、四天王等を導き入る(弘毅殿鴉羽雁家)

ひさつね

一色大炊久常。足利義教の奥小姓を勤め、細腰所の侍女新巻と通じて赤沼幸滿に見付けられ、幸滿これを見通す代りに藤内太郎家治の持てる小水龍といふ笛を折るやう頼まれて、家治の手にせる笛を折りたる後、家治が親心を變けるを語る。かくて後義教にも赤沼にも疑はれて落隠し、自殺せんとしし鞘を割れは一通の書出づ、亡父の靈蹟にて己は藤内五郎忠治といふ者なるを記せる(雪女五郎羽子)

ひさとみ

久富。長谷部國長に采國を奉はる。淳和天皇嚴島に行幸し給ひし時、久富御前に罷出で、國長が我采國を盗み浦島の子孫と偽りて嚴島の神主となれるを言上して國長と口論せる際、浦島太郎久富現はれて久富の子孫なるを言明す(浦島年代記)

ひさな

松永彈正久秀。三好修理入道長慶の重臣なり。鳥羽殿の片里七瀬川に檢屍に行き、足利將軍義隆の室の亡骸といひなして淺川左京大夫藤孝を欺かんとしして成らず。後、長慶と共に反し、義隆を襲うて之を

ひさよし

眞柴肥前大領久吉。平朝臣春長に仕ふ。勅使三條前大臣の御下向を迎へん爲春長より挿花の命を受け、金の瓢箪に夕顔の蔓一房を添へて生花とす。春長之を見て源氏物語の夕顔の故事によれるを羨む。かくて久吉は春長より蒙古征討軍の統率を命ぜられて出發せしむ、惟任判官光秀反して春長父子を弑したる報を得て大に驚き、直に八千騎を率へて春長の室の居城に斬付て敵軍を破り、光秀の逃ぐるを追襲して山崎に殺す。曾より久吉の武名一世に高し。伏見城に據り曾利と遊興せる際、久吉の舊主松平嘉平次來つて謁し、娘お通の胎内にある春忠の胤を守立つるやう頼む。久吉之を許し、奴に扮装して澶州濱松に赴き、お通の分娩したる子を連れ、威儀堂堂として歸洛に就く。これより住吉に詣りて四方の風氣を賞し、小西如清に朝鮮地圖を尋ねしめて三韓征伐の軍を起し、凱旋の後洛東に耳塚を築き、又春長父子菩提の爲に廣舎那佛を建立し、其供養の日三韓征伐の戰を浮羅瑪に作つて之を語らしむ(本朝三國志)

試し、朝日の岡に據りしが、足利義隆の軍に攻撃せられて冷泉造酒之進房平に殺さる(津國女夫池)

ひさよし

眞柴肥前大領久吉。平朝臣春長に仕ふ。勅使三條前大臣の御下向を迎へん爲春長より挿花の命を受け、金の瓢箪に夕顔の蔓一房を添へて生花とす。春長之を見て源氏物語の夕顔の故事によれるを羨む。かくて久吉は春長より蒙古征討軍の統率を命ぜられて出發せしむ、惟任判官光秀反して春長父子を弑したる報を得て大に驚き、直に八千騎を率へて春長の室の居城に斬付て敵軍を破り、光秀の逃ぐるを追襲して山崎に殺す。曾より久吉の武名一世に高し。伏見城に據り曾利と遊興せる際、久吉の舊主松平嘉平次來つて謁し、娘お通の胎内にある春忠の胤を守立つるやう頼む。久吉之を許し、奴に扮装して澶州濱松に赴き、お通の分娩したる子を連れ、威儀堂堂として歸洛に就く。これより住吉に詣りて四方の風氣を賞し、小西如清に朝鮮地圖を尋ねしめて三韓征伐の軍を起し、凱旋の後洛東に耳塚を築き、又春長父子菩提の爲に廣舎那佛を建立し、其供養の日三韓征伐の戰を浮羅瑪に作つて之を語らしむ(本朝三國志)

ひたかこ

悪文次秀景。百合若大臣の家老府内大秀主の子なり。好色によつて父より勅當を受け、角兵衛と稱名して彌羅界となり、美女立花の追はれ來るを彌羅に乗せて別府の追手を追散し、計らずも主君百合若の領地が別府兄弟に横領せられたるを知り、忠孝を盡すはこの時と決心し、有馬の楯に赴き

ひてか

悪文次秀景。百合若大臣の家老府内大秀主の子なり。好色によつて父より勅當を受け、角兵衛と稱名して彌羅界となり、美女立花の追はれ來るを彌羅に乗せて別府の追手を追散し、計らずも主君百合若の領地が別府兄弟に横領せられたるを知り、忠孝を盡すはこの時と決心し、有馬の楯に赴き

ひてぬし

府内大夫秀主。百合若大臣の家老なり。長子秀景の好色を怒つて勅當し、また次子秀虎が主君の軍に従はざりしを怒つて勅當す。或日病を治せんとしして有馬の湯に赴き、秀景に遇うて勅當を赦し且大刀を讓る。かくて後逆臣別府繁足を花火山に襲撃

て朝敵の湯安松が枝に落ち、其手引によりて浴客の太刀を盗みて其客の我父なるに驚き、大刀を棄てて匿る。父呼掛けて大刀を讓り、松が枝に嫁割の名乗りをなす際、別府繁足が浴客中にあるを知り、其入浴中を觀望して之を襲う。後、百合若と共に別府繁足を花火山に懸つて之を殺す。朝廷秀景の武功を誦し官位を授く(百合若大臣野守傳)

ひてさと

依藤太秀卿。朱雀院の承平二年十月の亥の日下野守に任ぜられて賀賀の折から、平将門反すとの注進あり。秀卿乃ち朝敵退治の將軍宣下を蒙らんことを奏請し、忠文との智恵争ひに勝つて錦木の姫及び將軍の宣旨を賜はる。これより下野國玉田の積野にて將門に一味せる忠文を刺し、進んで將門を攻めて之を滅す(傾城騷物)

ひてとら

市郎丸秀虎。悪文次秀景の弟なり。主君百合若の蒙古征伐に従軍せずして歸り父に勸當せらる。秀虎悔悟して百合若の後を追ひ、和田岬にて別府兄弟の船に乗つんとしして叶はず。嚴島に詣りて、捨小舟に乗つて君の行方を尋ね出づ。時に一矢飛來つて舟に立ち、尋で主従相逢ふ。是時別府繁足蒙古の寇に襲撃して攻奪す。乃ち戦つて之を殺し、別府繁足を花火山に懸つて之を滅し、主君の供して都に上る。官秀虎の武功を誦して官位を授く(百合若大臣野守傳)

ひてぬし

府内大夫秀主。百合若大臣の家老なり。長子秀景の好色を怒つて勅當し、また次子秀虎が主君の軍に従はざりしを怒つて勂當す。或日病を治せんとしして有馬の湯に赴き、秀景に遇うて勂當を赦し且大刀を讓る。かくて後逆臣別府繁足を花火山に襲撃

ひてぬし

府内大夫秀主。百合若大臣の家老なり。長子秀景の好色を怒つて勂當し、また次子秀虎が主君の軍に従はざりしを怒つて勂當す。或日病を治せんとしして有馬の湯に赴き、秀景に遇うて勂當を赦し且大刀を讓る。かくて後逆臣別府繁足を花火山に襲撃

して之を激し、去從都に上る。朝廷秀主の武功を嘉して官位を授く(百合若大臣野守) 功を嘉して官位を授く(百合若大臣野守)

ひてはる 鷹川藏人秀治。坂上田村麿の家老なり。相後元金刑部山國と福引の枕を引合ふ。田村麿の室若戸の前其枕を切つて匿名の髑髏を送りし者を吟味す。秀治冤罪を實ひて清水觀音の寶藏に進入り、山國其寶藏の匿に書きし筆蹟より己が髑髏を送りたることを發覺す。秀治佛力を得て山國を逮捕し、若戸の前を保護して鈴鹿山に下る途にて山國等に要撃せられ、奮戦して山國を斬り、田村麿と會して鈴鹿山の鬼神退治に武功を立つ(田村麿重初觀音)

ひてひら 藤原秀衡。淡海公の後胤にして奥州五十四郡の領主なり。金寶吉次信直に書狀を託して義經を招寄せ、領内十萬の兵を召集して義經を統率として、平家討滅の爲西上せしむ(十二段)

ひてみつ 中務秀光。播磨郡代賀古川前守吏藤原教孝の重臣なり。教孝の長男孝房の室及び其子光明丸が蜘蛛に害せられんとするを救ひ、惡漢熊原木と戦ひつゝ、波路をさして落ち行き、中山寺の眞如上人を頼みて光明丸を其弟子となす。後また中山寺を訪て光明丸の故塚を見尋ふ。光明丸恥ぢて夜逃げするや、其行方を尋ね、飛田の墓地にて孝房等と邂逅す(賀古教孝七墓廻)

ひなづる 鶴鶴。彌平兵衛宗清の娘にして幼名を松が枝と云ふ。清盛の妾となれる常盤に仕へ、常盤の意を受けて往來の人を呼入る。或日宗清禎冠にて入り來り、常盤を痛罵す。鶴鶴膝下に潛伏して宗清の左股を刺ししが、杖交なるを知つて深く罪を謝し、父の言

に従ひて常盤 積留と共に清盛の邸を脱走す(平家女殿) 古川權直清氏の女なり。斯波左衛門義將を戀慕して病を得。清氏乃ち藤内二郎盛治の妻を男裝せしめ、義將と稱して内に入る(雪女五枚羽子板)

ひはのきみ 琵琶君。葛西郡司清重の女にして足立右馬允景久と婚約あり。根原景時奥州征討將士の武功を吟味して、清重が四郎高衡を討預じたるを結る。清重憤怒して自刃し、景久琵琶姫との婚約を破る。琵琶姫これより零落して扇原の妓となり、名を唐琴と云ふ。扇山重忠に遇ひ、扇山家傳の陣笠を貰ひ、高衡の據れる筑紫の七草城に閉居して縛せられしが、縛を切り寄手の部將景久に矢を放つて敵情を通知して武功を立て、重忠の媒始によつて景久と婚す(傾城扇原琵琶合戦)

ひます 日益。大連物部守屋の母なり。佛法を習りしが、聖徳太子の不思議を見せ給へるに感じて佛に歸依す。守屋反逆を企て膳親實を殺さんとするや、日益乃ち守屋に意見して自ら死す(聖徳太子繪傳記)

ひやうすけ 横川兵衛。甲斐國守武田信立の足輕なり。大津の船宿に來り主從の乗るべき船を備はんとせしかども、既に越後の國守長尾藤虎の足輕に先を取られて詮方なく、口論を始めて藤虎に殺さる(信州川中島合戦)

ひやうふ 山形兵衛。後藤左衛門國忠を殺さんとす。小栗判官兼氏に妨げられ、兼氏を殺さんとす。兼氏に殺さる(當流小栗判官)

ひろらみ 弓削廣海。物部守屋の家士にして弓削勝海の弟なり。秦川勝と共に、公卿の室等を河内國志紀の山館に幽閉して其番を勤めしが、川勝大義に歸して公卿の室等を敵預せしかば、廣海怒り川勝を罵つて縛せらる。後聖徳太子の妃若媛姫を奈良手向山の庵室に包圍して逐鹿の追拂はれ、また河内稻村岬を聖徳太子の軍に攻められ、川勝と戦うて死す(聖徳太子繪傳記)

ひろくに 桂金吾廣國。散位紀有常の重臣なり。惟喬親王謀反を企て、清和天皇の官殿に來つて騒動を起さる。廣國、中官の御供にして落ちたるを宥容に渡す。有常の室夫より中官の首を刎ねよとの自盡の狀を得て、中官の身代りに井筒姫の首を刎ねんことを言ひしに、廣國の妻紅梅姫之に反對し、中官の首を刎ねんとし泊瀬寺に赴く。廣國之を聞きて直に泊瀬寺に馳付くる途に、同僚の民部太郎俊綱既に首桶を携へて下山するに遇ひ、俊綱が井筒姫を殺せるものと思ひ、俊綱を罵つて互に格闘せしが、有常の室が中官の身代りとなりしを知るや、直に俊綱と和解して罪を謝す。惟喬親王が清和天皇と細位爭ひの相討勝負に實けり舉行に及びんとせられしを俊綱と協力して親王を擁護(井筒葉平河内道)

ひろた 近藤兵衛守廣忠。縣人なり。伯左京進盛光の妾を續繼蘇し、盛光の不在に乗じて姦通して、盛光の姫若媛を還魂の池に投入れんとせしかば、若媛の眼病を幸に之を救きて斬髪を吞まして殺さんとす。是時盛光の家來望月六郎左衛門高貞來り、直に若媛を助け防戦し辛じて遁る。廣忠後を追うて北嶺巖なる靜三の庵室を襲撃す。かくて後奈良にて靜三等と途に遇ひ、之を捕へて守護職に渡し罪に陥れんとす。偶盛光來つて靜三

等の縛を解き、廣忠の犯罪を訴ふ。是に於て廣忠守護職に召捕られて刑に處せらる(三世相)

ひろつな 佐佐木二郎廣綱。備前兒島の戦に待賢時雨に遇うて藤戸の浦の淺瀬を尋ね、その教へざるを怒つて二女を縛す。盛綱藤戸の先陣をなざるを見て、その先陣を争はんとせしめ渡り得ずして引返す。後、翌朝に丙午の女を得んことを約し、盛綱の命と偽りて待賢時雨の母を召捕へ、鎌倉に連れ行き殺さんとせしが、奸策露呈して佐佐木定綱に斬らる(佐佐木先陣)

ひろつな 佐佐木廣綱。北條時定部下の士となり密に天女丸に心に寄す。伊豆細崎の海を渡つて天女丸を攻むる際、源藤太常景と先登を争うて之を妨げ、遂に時定を射殺す(最明寺殿百人上臈)

ひろつな 源八兵衛弘綱。源義經の使者となり院齋して平家討滅の有様を奏上し、また新黒谷に在る繼體信直の廟に臨み、義經秘藏の名馬黒馬を繼體の靈に捧げ(津戸三郎)

ひろふさ 鷹旗帶刀太郎廣房。攝津任が平惟茂を難せざるを廣房聞いて語任の言を厭す。廣房平國の寶劍を預り、世繼御前の乗物を守護して惟茂の邸に至る途に金剛兵衛利綱に要撃せらる。廣房寶劍を揮はれじと持逃び、山中に覺心して日を經過し、江州伊吹山の支那久作の家に忍びしが、寶劍を久作に預けて尚に彼家に歸つて見れば、妻子は閉門の墓目に遺ひ落首所所に貼られたり。是に於て寶劍の所在を語つて閉門を免れしめんと思ひ、壁を切破つて闖入し、妻より盜賊と疑はれて斬付けらる。廣房腹を掛け、其身は最早

生甲斐なし、早く久作より寶劍を取返して惟茂に渡せよとて後事を託し、妻に介錯せられて自刃す(他行御本地)

ひろぶみ

北白川の廣文。加藤兵衛氏綱の女種首が賀茂の安樂に参りたるを勾引して、江州鶴山の遊廓より屋長に賣る。橋竹長舟の奇責に堪へずして自刃するや、廣文其場に来つて前非を悔い、我元は憎陸介平安盛の重臣にて八郎權頭秀國と云ひしが、主君の勳氣を蒙つて浪人となり、遂にかかる非行をなしたるを懺悔して自刃す(傾城酒呑童子)

ぶがくのまへ

舞樂の前。大和國宇陀郡蒲門家の女にして和琴の前の異母姉なり。繼母に想はれて、賊者香春顯定と祝言の席上にて顯定誦共に殺されんとせしを、繼母顯定の母の善心に感じて悪心を翻し、舞樂の前も發心し、繼母誦共に河内國道明寺の厄となる。或日石川五右衛門、憲法の子の久吉を背負ひ、寺内に逃込みて大釜の中に潜匿せしを官人追及して捕縛す。是に於て舞樂の前は道明寺の老尼等と誦共に五右衛門の刑場に至り、久吉の爲に哀訴す(傾城吉岡染)

ふさ

房。大阪六軒町の娼家重井簡屋の遊女なり。紺屋徳兵衛と馴染み、親に逢るべき金の調運を頼み、徳兵衛と共に其家に行き、其妻たる振して口入業治右衛門に會ひて、徳兵衛に丁銀四百両を貸さしめしめて歸り、朋輩と火砲の戲をなせる際飛脚來る。房未だ託すべき金なくして苦悶す。後、徳兵衛と逢うて互に身の上を歎けるを抱主に覺られて火砲賣の苦を受け、徳兵衛と共に高津上鹽町大佛殿御進所に行つて情死す(心中重井簡)

ふさひら

冷泉造酒之進房平。淺川左京大夫藤孝の臣なり。三好修理入道長慶酒色を以て足利將軍義輝を誘惑し終に之を弑す。是に於て房平は妻の清綱と共に義輝の室を護つて福島に落ち行き、己が親冷泉文次兵衛長房の家に入る。是時房平、清綱と兄妹なるを聞き、それとは知らず欺りたるを恥ぢて死なんとせるを、長房制止し欺りて曰く、清綱は我子なれども、房平は胸形一應兼綱前妻の子なり、己兼綱の後妻に嫁し、爲に兼綱を暗殺して其妻を引入れたるものなれば、我は房平の爲には其父の仇にして、我妻の爲には其前夫の仇なれば、疾く首を討取れといふ。房平討ちかねたり。母乃ち前夫の仇と聲を掛け斬付け、妻と長く愛せられたることを謝し、直に池に投身す。長房も其並びの池に身を投ず。房平夫妻慈歎に暮る。かくて後、藤孝と共に義兵を催し、三好長慶を朝日の岡に攻めて之を滅す(津國女夫池)

ふさわか

房母。藤原得刀太郎廣房の子なり。父の死後母に連れられて江州伊吹山の久作を尋ね行き、店に並べたる文を掴みて久作の子の虎尻に敲打せらる。其後久作に斬られんとし之を殺し、母と共に迷ひ出で柞原州にて世無御前等に遇ひ、相共に惟茂を尋ねられ、戸隠山にて福諸任を殺して武功を立て(他行御本地)

ふち

阿藤。小倉倉九郎の妻お種の子なり。倉九郎江戸詰の留守中お種官地源右衛門と姦通す。お種は姉の不義を倉九郎に聞知せられんことを憂ひ、自ら鬘書を倉九郎に送り、懇請せる如く思はせて其妻となり、以て

姉を離別せしめて之を救はんとして成らず。お種悔悟して自刃するや、お種は倉九郎と共に源右衛門の宅を襲ひ、其追ぐるを追うて堀川橋上に殺す(堀川波鼓)

ふち

龍田の藤。實名を藤五郎といひ、江戸屋勝二郎の元手代新七の弟なり。遊女君妻を誘出して勝二郎に與へんとし吾妻に刺殺さる(淀屋出世浦漕)

ふぢさ

はにふだう。藤澤入道。夜盜の首魁なり。鐵の宿にて常盤及び其乳母千種を倭殺して財物を奪ふ。後、鐵の宿の名主の家を襲ひて牛若九に殺さる(十二段)

ふぢたか

淺川左京大夫藤孝。足利將軍義輝の忠臣なり。足利義昭が義輝に代つて勅使に謁せしを三好國長に罵らる。藤孝乃ち國長と口論す。藤孝鳥羽殿の片里七瀬川に捨屍に行き、松永重正久秀が屍體を將軍の室なりといひしを、藤孝よく見そ然らざるを知つて久秀の陰謀を察知す。義輝が遊女大泥の色香に溺れ、之を御所に引入れ發兵を極むるに及んで、藤孝の諫むべからざるを知つて大泥を斬る。三好長慶反して義輝を弑するや、藤孝諸國の義兵を募り、義昭を將として長慶を朝日の岡に攻めて之を滅す(津國女夫池)

貞廣に欺かれて荒川近平、大道寺勝房を斬らんとせしが、二人より寶劍を購取して其欺かれたるを覺つて恥づ。是時貞廣反すとの飛報を得て三人相約し、藤次は主君を尋ねて三河に、傍に途中、大隈小嶽の境なる辻堂に雨宿して、傍に眠れる旅人の雨具を盗まんとし覺られ互に斬合ひしが、折しも來合せたる大道寺に誰何せられて互に名乗合へば、計らずも皆別黨なり。是に於て三人邂逅したるを悦び合ひ、相共に三河に赴きて結城右衛門太夫種春の軍に合し、貞廣の擧げる取城を攻めて之を抜く(介川了俊)

天皇の寵愛を得て體倍せられ、按察左大將早孝に陥れられて壬生の里に籠居し、夜中羽倉伊賀介久國に殺害せらる。是に於て其怨靈毒蛇となつて官中に現はれしを安倍晴明に祈禱する。かくて後、天皇弘徽殿女御同車にて還幸せらるる途中、眞霧が原にて三尺許の蟻窠となつて出現し、早孝の怨靈を追拂うて溺入、忽ち藤原の妾に化現し、誤つて弘徽殿女御を恨みしことを謝し、弘徽殿をして皇男子を分娩せしむ(弘徽殿騎羽羅家)

ふぢつほ

のによこ。藤壺女御。花山天皇の寵愛を得て體倍せられ、按察左大將早孝に陥れられて壬生の里に籠居し、夜中羽倉伊賀介久國に殺害せらる。是に於て其怨靈毒蛇となつて官中に現はれしを安倍晴明に祈禱する。かくて後、天皇弘徽殿女御同車にて還幸せらるる途中、眞霧が原にて三尺許の蟻窠となつて出現し、早孝の怨靈を追拂うて溺入、忽ち藤原の妾に化現し、誤つて弘徽殿女御を恨みしことを謝し、弘徽殿をして皇男子を分娩せしむ(弘徽殿騎羽羅家)

ふぢるひめ

藤原。大體冠藤原の女なり。乳母を伴ひて父を尋ね、奈良の都を出で額州志戸浦に赴く(伊東冠)

ふぢのまへ

藤の前。伊東祐親の女なり。頼朝と通じて懐妊するや、祐親怒つて之を醫師法眼香樂に預け、其生める子を松川の水底に沈め、藤の前を平家の侍木判官無熊に嫁せしめんとなす。是に於て香樂は源家の爲に弟子春南に命じて藤の前を殺せしむ(源氏冷泉邸)

ふぢばかま 藤袴。銀杏の前の侍女なり。五十餘歳の醜女なるが若野四郎二郎を慕ひて抱付く(傾城反魂香)

ふぢばら 左衛門尉藤原。日野大納言資朝の家士なり。資朝の重臣石見守中原が北條相模入道に内應し、資朝の跡を絶たんと爲に資朝の一子阿新九の出家を玄憲法師に依頼せるを、藤原其場に斬付けて中原と論争し阿新九の出家を止む。また中原が茶會に托して資朝を招き弑せんとするや、藤原は資朝の供となつて行き主君の危急を救ふ。かくて相模、中原遂に資朝を弑めて六波羅に送り、後、阿新九より莫大の恩賞を得て騎著を極め、奈良に新能を催せし際、藤原は妙法坊と共に中原を襲撃して之を捕へ、阿新九をして中原の首を刎ねしむ(本朝用文章雜)

ふばてつべい 駝馬鐵平。韃靼主第六王子なり。明に人質となりて行き幻術を行ふ。後また東寧島にて幻術を行ひて島民を信仰せしめ、金を與へて之を擧げんとし、東寧城を擧ひ幻術を以て敵を悩さんとして國性爺等に殺さる(國性爺後日合戦)

ぶり 大阪北久太郎町古道具商笠屋長兵衛の女下なり。長兵衛の娘お龜の供して神子町黒格子辻の宅に立寄る(卯月紅葉)

お龜非業の死を遂げたる後、長兵衛の供して神子町を通り、お龜のことを思出して泣く(卯月調色)

ぶりやくのすけ 才若武略之介。徳若智略之介の弟にして、故三位侍人富士丸の家臣なり。年頭の祝儀に大内にて萬歳樂を奏す。丹波に下りて歸る途に富士丸の娘瀧湯姫が太見縣主時兼主従に襲はるるに遇ひ、直に

時兼等を追拂ひて姫を救ふ。後、姫及び其愛人兵衛中將喜枝の行方を尋ね、木津の渡にて彌介狐に遇ひて天鼓及び湯湯姫のことを聞き、また京都六條左近衛に誘引せられて猿蓑ふの御前に出て忝き御説を賜はる(天鼓)

ぶん 玉屋文次。築津國昆陽の旅人宿玉屋の主人なり。桃園 藤五郎豊舟と二位姫との旅舎にて契を結ぶ(日本西王母)

ぶんた 北脇文太。備前の惣名主なり。藤木夫の寡婦及び其娘婿時雨が狂女となりて、藤月の浦の砂を採へ置棄の妨げざるを訴へ、領主佐佐木盛綱の命によりて其狂女を預り優遇す。然し佐佐木廣綱が盛綱の命と詐りて藤木夫の寡婦を捕へ去る。文太怒つて鎌倉と下り、藤木夫の寡婦の半輿に入替り、由比濱の刑場にて廣綱を突刺す(佐佐木先陣)

ぶんろく 文六。因幡の藩士小倉彦九郎の養子なり。彼を官地源右衛門に學びし、義母お種・源右衛門と姦通したること露顯して自刃す。是に於て義父等と共に源右衛門の宅を襲ひ、其逃ぐるを追ひ堀川橋上にて斬殺す(堀川波鼓)

へいだ 磨針兵太。官大村任の下人なり。眞砂乙太郎勝興に苛まれ、村任を押籠めたる古葛籠を獲はされて追拂はる。後、村任と共に桃園染五郎豊舟を殺さんと其行方を尋ね、櫻園にて勝興に遇うて殺さる(日本西王母)

へいだ 物部平太。坂田前司忠時を殺して平政盛の家來となる。或日佐夜の中山の旅人宿蔭屋に清原右大將高藤の保護を頼みて同居し、下女の小糸が忠時の女なるを知らずして蓬髪を剃らせ、小糸より親の敵と聲を掛け

られて、小糸の情夫大善之介に殺さる(嶺山姥)

へいへ 平兵衛。大阪備後町鍛冶職大文字屋利右衛門の弟子なり。堂島新地平野屋の遊女こかんと馴染む。或日大文字屋の内儀等と北野不動に詣で、堂島新地の遊廓見物の案内して歸る。折しもこかんの伯母來れるに遇ひ、圓元よりこかんを連れ歸らんとし來れる者ある由を聞き、早くこかんを誦出さんとす。幾多より調合ひたる雪窟の裏金を調へて其代金を身請金にせんとせしを、主人より拒絶せられて共々に放逐せらる。是に於てこかに逢ひて共に死を決し、寶水六年六月一日の夜中北野神明宮附近藍畑に走つて情死す(心中双水辨日)

へいま 乾平馬。圓大臣の臣なり。龜の生血を得んとして丹後國與謝郡水の江の浦に來り、大龜を獲得せしを浦島太郎久壽に奪はる。平馬怒つて久壽の妻を海に沈め、泊瀬皇子を狙ひしが久壽・齋園等に追拂はる。後、飛鳥の都にて久壽に刺殺さる(浦島年代記)

へいろく 三谷平六。荒金刑部山國の家士なり。山國主家を傾倒して榮花を極む。平六乃ち山國に勸めて坂上田村麿を討取らんとし、主従變装して土山に下り、田村麿の室を襲撃して馬方六藏に殺さる(田村將軍初觀音)

へいあむ 島田平右衛門。山城國上田村の農なり。女お千代大阪新觀音掛町八百屋半兵衛に嫁せしが、夫が濱松奉行の留守中始に離縁を迫られて歸る。半兵衛遠州より歸る途に平右衛門方に立寄る。時に平右衛門病床にあり、お千代に命じて平家物語兼平の段を讀ませしめて之を評し、以て半兵衛に罵詈す。是に於て半兵衛始めてお千代の事情を知り、

乃ち離別せざるを誓ひ、之を連れ大阪に歸る。平右衛門喜んでお千代の婿に門火を焚かせて之を送る(心中寄腹申)

へんけい 武藏坊辨慶。熊野別當辨眞の子なり。辯眞山の僧になつて修行多かりし爲に捕へられて清盛の僧に引出されて暴行多かりしに牛若の討手を命す。辨慶乃ち五條の橋上にて牛若と闘ひ、力及ばずして主従となり、常盤刑部尉の堀に赴きて之を救ふ(孕寄腹)

義經の使者となりて泉の館に行き、泉忠衛の室の前に面會して三干兩の無心を請へしかば、忠衛怒つて其請を破拒して罵詈せしかば、義經怒つて去る。辨慶高館の城外にて常陸坊海母に遇ひ、桃源延命酒・銀の心葉・黄金の盃・瑠璃の壺を得て之を義經に渡す。また九條戸太郎圓衛の軍と戦うて苦戦に陥り、衣川に流れ來れる新御堂の仁王を拾ひて之を身代りとなし血路を開いて遁れ、義經を追うて蝦夷に渡り、鞍馬大僧正に邂逅して其助を得、追撃し來れる銀戶等と戦うて之を殺す(源義經將基經)

源義經の臣なり。屋島の合戦に數多の敵の首を刎ね珠數撃きにして軍功を立つ。安西源正太郎氏重が鷲尾三郎を謀したるを怒つて氏重を投飛す。また佐藤經信の屍に引連して取らせんとて辨慶一流の陀羅尼を讀上ぐ(津戸三郎)

義經が九條北町柏屋よりの歸途を三保谷四郎圓時に要撃せられ、辨慶被れる首級を捲つて躍出て、片岡八郎と共に力戦して三保谷を殺す。義經が北條四郎時政に意見せられて都を開くや、辨慶無念の餘り中途より引退し、老翁の鬢を被つて梶原平次景昇の固めたる開門を破り、小早川隆藤太を殺す。かくて義經に

陪して攝州尼が崎大物浦より乗船せしが、雌風に遭ひて住吉浦に漂着し、これより吉野に分入る(吉野忠信)

源義經に陪して北野天神社に参詣し、土佐坊昌俊が神樂堂の蔭に隠れて義經を狙へるを搦出して義經の前に引据ふ。其夜昌俊部下を率ゐて義經の堀河の邸を襲撃するや、辨慶を戦して昌俊を捕ふ。かくて義經都を聞き、辨慶等と共に主従十二人修験者の姿となつて安宅開にかかり、富樫左衛門家直の警固厳しき由を聞き、辨慶まづ閉所に至つて家直に搦められしが、家直・義經主従に同情して一行の通過を許可す。是に於て義經主従無事に奥州に下つて藤原秀衡に頼る(義靜胎内坊)

へんせう 僧正遍照。皇子の病氣平癒を祈る。後、官寮内する途中嵯峨野にて松風の難儀を救ひ、恒寂の軍と戦うて之に勝つ(松風村雨束帶巻)

ほうこくこくし 豊國國師。攝州尾上にて諸君の先妻尾上の鐘を破きて失せたる時、國師五大明王・五龍神の祕法を行ひて祈禱す(用明天皇職人鑑)

ぼくあん 澁川卜庵。大阪本町新物店菱屋の主入四郎右衛門に灼灸す(今宮心中)

ぼふげん 川倉法眼。大和吉野山の僧なり。源義經が吉野の奥に逃入りたるを横川覺範等と共に之を討取らんとし、義經の家士佐藤忠信に殺さる(吉野忠信)

ぼふしやうばうのそうじやう 法性坊僧正。延慶寺の座主にして菅丞相の師なり。或夜十六夜の晝來つて變成男子の祈禱を依頼す。尋で菅丞相の晝來つて、雷祈禱の爲に内裏より召さるとも行かぬやう詔ふ。法

性坊答ふるに、官中より御召三度に及ばば則ち行くを以てす。菅丞相の晝驚つて柘榴を口に嚙んで吐懸くれば火桶となつて燃ゆ。僧正咒詛して之を消す。かくて雷鳴の爲内裏より召さること三度に及ぶ。法性坊乃ち妻内して雷滅除の祈禱をなす(天神記)

ぼふねんしやうにん 法海上人。新黒谷の高僧なり。津戸三郎勝平等に頼まれて佐藤信備追善供養をなす。勝平が佛法に歸依して自刃するや、法然乃ち佛法の不思議を見せしむ。之を願樂淨土に往生せしむ(津戸三郎)

まきふて 巻筆。布引次郎照房の妻なり。舅勝成が菅彦尊を刺さんとし、屍物の倉に出でたる跡を慕ひ行き、勝成が首を拾ひて歸る。後、持統天皇の勅を奉じて夏仁親王を尋ね行き、山の中に山賊萬九郎に刺殺さる(持統天皇歌軍法)

まごあもん 粉屋孫右衛門。紙屋治兵衛の兄なり。「ちへゑ」の條を見よ(心中天網島)

まきかど 平將門。朱雀院の承平二年十月反逆を企て、攝島に皇居に擬して邸宅を造り、逆して王と稱し女色に耽り、同じ姿の七人に化現せしが經連盡きて秀郷に刺殺さる(領域懸物編)

まさきよ 鎌田兵衛正清。源義朝の重臣なり。主君に従ひて屋敷に宿ち行き、妻宿木の實家長田司忠宗を便り、酒宴の席にて忠宗に騙討に遭つて殺さる(鎌田兵衛名所説)

まさきよ 加藤虎之助正清。眞柴肥前大領入吉の供小姓を勤む。平朝臣春長の命を奉じて惟任判官光秀の頭を毆打し、久吉に叱られて蒙古征伐軍の留守を命ぜらる。光秀反して春長を本能寺に弑すや、正清逃れ馳に駆付け、敵中に飛入り春長の首を拾ひて、其事變を春長の嫡子の春忠に報告し、敵軍と奮戦して光成の首を刎ぬ。後、久吉朝鮮征伐を思立つや、正清乳守の里に遊女小儀を訪うて其所持せる朝鮮地圖を懇請す。是時小儀の情夫小西彌十郎其地圖を奪はんとし、正清と格闘せしが、小儀の仲儀によつて和解し、相共に朝鮮征伐の軍に従ふ(本朝三國志)

まさしく 梅津源左衛門正國。常盤の父なり。常盤が清盛の妾となつて、怒に觸れて、捕へられて正國の門前にて磔刑に處せられんとする際、俄に産氣付きて清盛の子を生む。正國清盛を怨んで常盤の生める子を殺す(孕常盤)

まさしげ 楠木正成。足利尊氏西國の兵を率ひ海陸より都へ攻上る。正成謀を獻し、暫く天皇吉野に幸し給ひ、敵をして恣に京師に入らしめ、然して後河を獲き糧道を絶ち、敵の疲るるに乗じ四方より攻めて之を破らんこ

とを奏せしが、坊門宰相清忠に妨げられて用ゐられず。是に於て正成死を決し、澗川に出陣する途中、櫻井峠にて子の正行を前に抱き教訓して故郷に歸し、澗川にて尊氏と決戦して利あらず、退いて民家に入り、弟正季に謂つて曰く、吾子何處にか魂を託せんと欲する。正季曰く、願くは七度人間に生れんと欲するさんと。正成欣然として死す(吉野都女捕)

まさずみ 修理之介正澄。土佐將監光信の門弟なり。元信の畫きたる虎生動せるを正澄畫虎を採殺し、光信より土佐光澄の名を貰ふ(領域反魂巻)

まさつら 楠木正行。幼少の時足利尊氏と戦はんとし走出て母に制止せらるる際、名和長年が後醍醐天皇を守護し來るに遇ひ、相謀りて天神森に陣して朝敵を破り、長年と共に天皇に供奉して吉野の内裏へ急ぐ(吉野都女捕)

まさとし 原五郎昌俊。甲斐國守武田信玄の家士なり。信玄に陪して浪人山本勘介晴幸を草履に訪ふ。後、勝頼の不興を宥め衛門姫との婚儀を懇請して聽かれず。勝頼武功を立て甲越和解するに及んで、昌俊等勝頼を誘引して婚儀を擧ぐ(信州川中島合戦)

まさのぶ 高坂彈正政信。甲斐國守武田信玄の重臣なり。勝頼に陪して信州諏訪明神に参詣す。勝頼途に長尾謙虎の姫御殿に遇ひて相思の仲となり、於て政信・義清相争へる際勝頼の行方を失し、之を尋ね行き路傍の辻堂に宿る。折しも一人の男來つてここに憩ひ、腰にせる瓢を傾け一二杯飲んで眠る。政信其瓢を盗みて飲み盡し、誰何せられて能